

産まれてきた娘に贈る言葉

何の変哲もないある冬の日のこと。あなたは永遠の淵から掬い上げられ、私たちのもとに遣わされました。初めて見るあなたは河童とモグラの合いの子でした。

閉ざされていたあなたの瞳にはやがてまばゆいばかりの光がさしこみ、めくるめく世界への扉が開かれます。色とりどりのものものがあなたを取りまき、あなたの周りを飛び跳ねては消えていきます。あなたの口からはやがて笑い声がはじけ、言葉が芽吹きます。

それから幾たびもの冬を越すと、あなたはあなたとして再び生まれるときを迎えます。そのときあなたは光にはつねに影が寄り添うことを知るでしょう。怒りとざわめきに満ちた世界のただ中で永遠の静謐を懐かしく思うこともあるでしょう。そんなときは思い起こしてください、人はみな冬空に瞬く星々のようなものであろうことを。

あなたがやがて年老いて『時の流れは美しい』とつぶやくとき、すでに永遠の世界にいる私たちはあなたを迎える準備に大わらわでしょう。